

各国の音楽カリキュラムにおける鑑賞・聴取領域の内容に関する研究

—コンテンツベース, コンピテンシーベースの視点を中心に—

三 村 真 弓

(本学大学院教育学研究科)

峯 恭 子

(大阪大谷大学)

吉 富 功 修

(本学名誉教授)

伊 藤 真

(本学大学院教育学研究科)

松 下 友 紀

(広島県立西条特別支援学校)

井 本 美 穂

(本講座大学院博士課程後期在学)

Music Education Curriculum in Various Countries: Comparison of Curricula with Respect to Content- and Competency-Based Ideas

Mayumi MIMURA

Kyoko MINE

Katsunobu YOSHITOMI

Shin ITO

Yuki MATSUSHITA

Miho IMOTO

Abstract

In education, awareness has grown in recent years about the importance of cultivating competency (quality and ability) in addition to content (knowledge and skills). Accordingly, there is increased emphasis on a competency-based—rather than content-based—curriculum for all subjects. Competency here consists of generic competencies as well as subject-specific competencies. The present study aimed to clarify differences in the music curriculum of a number of countries with a focus on the content with respect to appraising and listening to music. The targeted countries were Japan, Germany (Hamburg), England, and the United States. This study attempted to define the subject-specific competencies in school music education in those places and examine whether they had content-based or competency-based music curricula.

The curriculum in England includes many subject-specific competencies with respect to school music education. However, the curriculum does not include generic competencies. The school music curriculum in Germany includes subject-specific competencies. Some of those competencies are also connected to generic competencies. The music curriculum in the United States includes many generic competencies. Music knowledge is included among the content-based elements of the US curriculum, but there is no evidence of skill-related content. Japan has mainly a content-based music curriculum: there are no subject-specific or generic competencies in school music education.

I 研究の背景と目的

21世紀は知識基盤社会といわれており、これまでに学校教育で獲得をめざしてきた教科の知識やスキルだけではなく、意欲や態度をも含んだコンピテンシーの育成が求められている。教育界では、知識基盤社会で求められる資質・能力を定義し、それをもとにした教育改革が世界的に試みられている。日本におい

ては、国立教育政策研究所が21世紀型能力を提示した。この21世紀型能力は、「思考力」「基礎力」「実践力」の三層から構成されている。

これを踏まえて、次期学習指導要領改訂に向けて、文部科学省の有識者会議である「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容の在り方に関する検討会」が2012年12月から2014年3月にかけて開催され、2014年3月31日に取りまとめが発表された。そのなかで、「従来の学習指導要領は、児童生徒にどのような資質・能力を身に付けさせるかという視点よりも、各教科等においてどのような内容を教えるかを中心とした構造」であったため、「学習を通じて『何ができるようになったか』よりも、『知識として何を知ったか』が重視されがちとなり、また各教科等を横断する汎用的な能力の育成を意識した取り組みも不十分と指摘されている」と述べ、次期学習指導要領改訂に向けては、より効果的な教育課程への改善を目指し、「学習指導要領の構造を、育成すべき資質・能力を基点として改めて見直し、改善を図ることが必要」としている（育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会＝以下、検討会、2014a）。そのために、以下の3つの視点をもとに、構造化することが考えられるとしている。

ア) 教科等を横断する、認知的・社会的・情意的な汎用的なスキル（コンピテンシー）等に関わるもの

①認知的・社会的・情意的な汎用的なスキル等としては、例えば、問題解決、論理的思考、コミュニケーション、チームワークなどの主に認知や社会性に関わる能力や、意欲や情動制御などの主に情意に関わる能力などが考えられる。

② メタ認知（自己調整や内省・批判的思考等）を可能にするもの。

イ) 教科等の本質に関わるもの

具体的には、その教科等ならではのものの見方・考え方、処理や表現の方法など。例えば、各教科等における包括的な「本質的な問い」と、それに答える上で重要となる転移可能な概念やスキル、処理に関わる複雑なプロセス等の形で明確化することなどが考えられる。その内容を具体的に明確化するとともに、学習指導要領におけるその示し方についても検討する必要がある。

ウ) 教科等に固有の知識・個別スキルに関わるもの（検討会、2014b, p.21）

また、「今後求められる資質・能力を育成するためには、個々の教科等の教育目標の達成に必要な具体的な内容について、知識・技能を習得し、更にはそれを活用し、課題を探究していくという統合的な学習活動を特に重視する必要がある。特に、汎用的なスキルは、こうした学習活動の文脈の中で効果的に育成されるものと考えられる」（検討会、2014b, p.21）とし、さらに、「本質的な問い」について、「子供自身が『本質的な問い』を探究する中で知識やスキルを活用しながら思考力・判断力・表現力等を発揮していくことを通じて、「永続的理解」が身に付くことが期待できる」（検討会、2014b, p.22）と述べている。

上記イ)の音楽科の本質に関わるコンピテンシーを現段階で明確に定義することは難しい。特に技能教科である音楽科では、スキルとコンピテンシーの違いをどう定義するかは大きな課題であろう。つまり、聴取力、感受力、知覚力等はスキルなのか、コンピテンシーなのかという問題である。上記の内容からは、教科の本質に関わるコンピテンシーとは、単なる能力ではなく、習得された教科の知識・スキルを活用して、思考・判断し、問題解決していく資質・能力と読み取れる。

一方、育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容の構造を考えるには、①教育課程全体で育成すべき一般的な資質・能力を設定し、それを各教科等の中で、教科等の特質に応じてどう選択し具体化するかを検討するという手順と、②各教科等の中で重要な資質・能力（教科等別能力）を抽出し、その集積・結合・再編を通じて、教育課程全体でどのような資質・能力を育成していくかを検討するという手順があるとされている（検討会、2014b, pp.25-26）。つまり、コンピテンシーベースのカリキュラムを構成する考え方も一様ではないということである。

そこで本研究では、各国の音楽科カリキュラムにおける鑑賞・聴取領域の内容を中心に精査することによって、音楽科の本質に関わるコンピテンシーとは何なのかを探りつつ、各国の音楽科カリキュラムがコンテンツベースなのか、コンピテンシーベースなのか、カリキュラム構成はどのような考え方に基いているのか等を検討することを目的とする。研究の対象とするのは、日本の学習指導要領・音楽（2008）、ドイツのハンブルク州の音楽科教育プラン（2011）、イギリスのナショナル・カリキュラム音楽（2013）、アメリカの全米コア音楽標準（2014）である。鑑賞・聴取領域に焦点を当てるのは、表現領域に比べて、コンテンツベースになりやすいと考えられるからである。

（三村真弓）

Ⅱ 日本の学習指導要領・音楽（2008）

1 鑑賞領域の目標と内容

表 1 小学校・中学校鑑賞領域の目標

校種	学年	目標
小学校	第1学年・第2学年	様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を育て、音楽を味わって聴くようにする。
	第3学年・第4学年	様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を伸ばし、音楽を味わって聴くようにする。
	第5学年・第6学年	様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を高め、音楽を味わって聴くようにする。
中学校	第1学年	多様な音楽のよさや美しさを味わい、幅広く主体的に鑑賞する能力を育てる。
	第2学年・第3学年	多様な音楽に対する理解を深め、幅広く主体的に鑑賞する能力を高める。

小学校の目標に掲げられている「基礎的な鑑賞の能力」とは、「音楽を聴いて、音楽を形づくっている要素のかかわり合いや、それによって醸し出される曲想を感じ取り、味わう能力のことである。」としている（文部科学省，2008a，pp.25, 44, 64）。中学校の目標に掲げられている「幅広く主体的に鑑賞する能力」に関して、『幅広く』鑑賞するとは、多様な音楽を取り上げて、音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取り、音楽の特徴をその背景となる風土や文化・歴史と関連付けるなどして鑑賞することを意味している。さらに、『主体的に』を加え、鑑賞した音楽について言葉で説明するなどの主体的・能動的な鑑賞活動を重視した。」とし、これによって「多様な音楽の特徴をとらえて音楽文化に対する理解を深め、音楽を尊重する態度を育てることにつながっていく」としている（文部科学省，2008b，p.24）。

表 2 小学校・中学校・高等学校鑑賞領域の内容

校種	学年	内容
小学校	第1学年・第2学年	ア 楽曲の気分を感じ取って聴くこと。 イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取って聴くこと。 ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。
	第3学年・第4学年	ア 曲想とその変化を感じ取って聴くこと。 イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造に気を付けて聴くこと。 ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさに気付くこと。
	第5学年・第6学年	ア 曲想とその変化などの特徴を感じ取って聴くこと。 イ 音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造を理解して聴くこと。 ウ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること。
中学校	第1学年	ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。 イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて、鑑賞すること。 ウ 我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。
	第2学年・第3学年	ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。 イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること。 ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること。

高等学校	音楽Ⅰ	ア 声や楽器の音色の特徴と表現上の効果とのかかわりを感じ取って鑑賞すること。 イ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して鑑賞すること。 ウ 楽曲の文化的・歴史的背景や、作曲者及び演奏者による表現の特徴を理解して鑑賞すること。 エ 我が国や郷土の伝統音楽の種類とそれぞれの特徴を理解して鑑賞すること。
	音楽Ⅱ	ア 声や楽器の音色の特徴と表現上の効果とのかかわりを理解して鑑賞すること。 イ 音楽を形づくっている要素とそれらの働きを理解して鑑賞すること。 ウ 楽曲の文化的・歴史的背景や、作曲者及び演奏者による表現の特徴について理解を深めて鑑賞すること。 エ 我が国や郷土の伝統音楽の種類とそれぞれの特徴について理解を深めて鑑賞すること。
	音楽Ⅲ	ア 音楽の構造上の特徴と美しさとかかわりを理解して鑑賞すること。 イ 現代の我が国及び諸外国の音楽の特徴を理解して鑑賞すること。 ウ 音楽と他の芸術や文化とかかわりを理解して鑑賞すること。 エ 生活及び社会における音楽や音楽に関わる人々の役割を理解して鑑賞すること。

小学校の鑑賞領域の内容について、「低学年の鑑賞の活動では、楽曲を全体にわたって感じ取る能力、楽曲の構造を理解して聴く能力、楽曲の特徴や演奏のよさを理解する能力を育てていくことが指導のねらいとなる。これらのねらいを実現するために、音楽を聴いて感動する体験などを大切にしながら、児童が思いをもって楽しく聴こうとしたり、音楽を全体にわたって感じ取ったりする活動を進めていくことが重要である。」(p.37)とされており、中学年や高学年でもほぼ同様な内容が記されている(pp.56-57, 77)。

中学校の鑑賞領域の内容の、「言葉で説明する」ことは、「生徒にとって、音楽によって喚起された自己のイメージや感情を意識し、確認することになる。また、その過程で音楽に対する感性が豊かに働くのである。」(文部科学省, 2008b, p.36)としている。また、「根拠をもって批評する」ことによって、「他者とかかわりの中から自分の価値意識を再確認し、音楽の構造などを一層客観的に把握したり、音楽の味わいを一層深めたりすることが考えられる。」としている(文部科学省, 2008b, p.52)。すなわち、言語活動は、主体的・能動的な鑑賞活動の有効な手段であるとともに、音楽に対する自分自身の価値観の再認識や音楽の感性の深まりを促す手段であるといえるだろう。(三村真弓・井本美穂)

2 考察

小学校では「感じ取る能力」「味わう能力」「理解する能力」等が多用されているが、それらは、音楽科の本質的な問いに関して思考し判断する際に活用されるスキルであり、音楽科の本質に関わるコンピテンシーとはいえないだろう。中学校における「根拠をもって批評する」は、「自己の価値意識を再確認する」という文言からはコンピテンシーといえなくもないが、その結果が「構造などを客観的に把握する」「音楽の味わいを深める」という目的になるのであれば、音楽科の本質的な問いの解決に直に繋がるコンピテンシーとはいえないのではないだろうか。すなわち、主体的・能動的な鑑賞活動の有効な手段としての役割が強いと考える。また、「関連付けて」も、その結果が「理解する」「鑑賞する」となっており、コンピテンシーとはいえない。(三村真弓)

Ⅲ ドイツ・ハンブルク州の音楽科教育プラン (2011)

1 「受容」の内容

ドイツ・ハンブルク州では、教科専門的能力を「創造 Produktion」「受容 Rezeption」「省察 Reflexion」の3領域に整理し、各領域の到達目標を示している。3つの領域は相互に関連し合っており、行動志向の授業において極めて重要なのは音楽の創造、すなわち演奏に関わる領域であるが、アンサンブルの構成要素でもあり、音楽について熟考したり話をしたりするための前提条件ともなるのが、積極的な聴取(aktive Hören)、つまり「受容」であることが、基礎学校(小学校)の音楽科教育プランに記述されている。

(1) ハンブルク州基礎学校 (1~4 年生) の「受容 Rezeption」

この領域において、音楽の授業は子どもの知覚能力と経験的に活動する能力、他者を思いやり受け入れる準備態勢を支援する。また、美的理解、美的経験、美的形成のための基礎をつくる。さらに、静かになるための準備態勢と静けさを知覚する能力、それらを適宜活用したり、保持したりすることを支援する。これらを基礎として、音楽の授業は、より大きな思いやり、聴取時のより強い集中と忍耐への道を開く。音楽的記憶力と聴取した印象の構造を分析する能力が専門教育によって伸ばされる。

音楽のもつ印象とその印象が生みだす作用の関わりによって、受容の領域は感覚・知覚能力を支援し、音楽と感情の結び付きをつくる。音楽の授業は、共感したり感情を移入したりすることの教育に適しており、子どもの感情の発達を支援する。

表3 ハンブルク州基礎学校 (小学校 1~4 年生) における「受容」の観察規準と到達目標

2 年生までの観察規準	4 年生までの到達目標
〔音楽を聴く〕	〔積極的な聴取態度で音楽を捉える〕
<ul style="list-style-type: none"> ・みんなと一緒に演奏しているときに友達の音や音楽を意識して聴いているか。 ・静かになることができるか、また静けさを知覚することができるか。 ・聴取課題 (動きや絵など) との関係を意識しながら、集中して音楽を聴くことができるか。 ・様々な音楽ジャンルに自由に出会っているか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な時代と伝統の音楽作品から年齢に合ったものを集中して聴く。 ・音楽の表現手段に気づき、再認識する。
	〔聴取した音楽を視覚化する〕
	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を簡単な図形譜で記す。 ・音楽作品に合わせて絵や舞台表現を作る。 ・音高の移り変わりを知覚し、それらを動きやテキストで表現する。
	〔聴取した音楽を言語化する〕
	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の諸要素を用いて音楽の形と作用を説明する。 ・聴取した音楽についての主観的な記述内容を受容する。

Freie und Hansestadt Hamburg, Behörde für Schule und Berufsbildung (Hrsg.) (2011) *Bildungsplan Grundschule, Musik*, S.11.

(2) ハンブルク州地域学校 (5~13 年生) の「受容 Rezeption」

中等学校修了資格は 10 年生で取得するため (前期中等教育段階が 5~10 年生)、音楽科教育プランも 10 年生までについて記述されている。音楽の授業は生徒の感覚能力と経験的に活動する能力を支援する。聴取と演奏のプロセスにおけるコミュニケーションは、知覚に加えて、生徒の言語表現能力および音楽の専門的語彙の習得を訓練する。

表4 ハンブルク州地域学校 (5~13 年生) における「受容」の到達目標

5・6 年生の到達目標		7~10 年生の到達目標	
6 年生までの最低要求	6 年生までの発展要求	2 年後の最低要求	4 年後の最低要求
〔積極的な聴取態度で音楽を捉える〕			
みんなと一緒に演奏しているときに、互いの音と音楽を意識して聴く。	さらに高い注意力で音楽を聴取する。		
静かになることができる、また静けさを知覚することができる。			
聴取課題との関係を意識しながら、集中して音楽を聴くことができる。	様々な時代と伝統の音楽作品を集中して聴く。	様々な時代と伝統の音楽作品を集中して聴く。	
	音楽の表現手段に気づき、再認識する。	音楽をさらに詳細に焦点化して聴く。	音楽をさらに詳細に意味を推論しながら聴く。
	様々な音楽ジャンルに自由に出会う。	様々な音楽ジャンルに自由に出会う。	

〔聴取した音楽を視覚化する〕			
音楽を簡単な図形譜で記す。	簡単なメロディーをある程度記譜する（音高とリズム）	音楽を図形譜で記す。	
音楽作品に合わせて絵や舞台表現を作る。		音楽作品に合わせて同等の絵を描く。	
〔聴取した音楽を言語化する〕			
音楽の諸要素を用いて音楽の形と作用を説明する。	聴取した音楽の観察結果や、形と構造、表現と作用などの頭で考えた事象について、学習した概念を用いて言葉で適切に表現する。	音楽の諸要素を用いて音楽の形と作用についてさらに詳細に説明する。	学習した専門的概念を用いて、音楽の形と構造、表現と作用について、更に詳細に、記述して説明する。
	聴取した音楽についての主観的内容を記述する。	聴取した音楽についての主観的内容のすべてを記述する。	
	様々な楽器を知り、名前を一致させる。	様々な楽器を知り、名前を一致させる。	

Freie und Hansestadt Hamburg, Behörde für Schule und Berufsbildung (Hrsg.) (2011) *Bildungsplan Stadtteilschule Jahrgangsstufen 5-11, Musik*, S.21.

(伊藤 真)

2 考察

日本における教科の本質に関わるコンピテンシーは、ドイツでは教科専門的コンピテンシーと学習方法論的コンピテンシーとされ、汎用的なコンピテンシーは社会的コンピテンシーとされている。基礎学校における、「経験的に活動する能力」「音楽的記憶力と聴取した印象の構造を分析する能力」「音楽のもつ印象とその印象が生み出す作用の関わりによる音楽と感情の結び付き」は、単なる能力ではなく、複数の能力を駆使した課題解決能力であり、教科専門的コンピテンシーと学習方法論的コンピテンシーであるといえる。また、「静けさを知覚する能力」は、他者に対する思いやりや、聴取時の強い集中と忍耐へ繋がることから、社会的コンピテンシーといえるだろう。

ハンブルク州地域学校における、「経験的に活動する能力」「気づき、再認識する」「意味を推論しながら聴く」も、思考・判断に関わるものであり、教科専門的コンピテンシーと学習方法論的コンピテンシーであるといえる。また、言語化の項目で、「頭で考えた事象について、学習した概念を用いて言葉で適切に表現する」「学習した専門的概念を用いて音楽の形と構造、表現と作用について説明する」も、習得した知識をもとにそれを活用し、思考・判断している点で、教科専門的コンピテンシーであろう。さらに、「聴取と演奏のプロセスにおけるコミュニケーション力」は、教科専門的コンピテンシーであると同時に、言語表現能力に結びついていることから社会的コンピテンシーにも繋がっている。(三村真弓・伊藤 真)

IV イギリスのナショナル・カリキュラム音楽 (2013)

1 音楽科の内容

イギリス (イングランド) では、ナショナル・カリキュラムによって教育の大枠が定められている。ナショナル・カリキュラムは、サッチャー政権によって成立した教育改革法 (1988 年) によって導入された。音楽に関しては 1992 年に導入され、1995 年に KS1~3 が改訂、1999 年に KS1~3 が改訂、2007 年に KS3 が改訂、2013 年に KS1~3 が改訂された。ナショナル・カリキュラムでは、日本のように 1 学年ごとではなく、数学年をまとめてキー・ステージ (以下、KS) が設定されており、KS ごとに必修教科やその内容が示されている。わが国の高等学校までに対応する KS は、KS0 (3-5 歳) が保育園、KS1 (5-7 歳) が幼児学級~小学校 2 年、KS2 (7-11 歳) が小学校 3~6 年、KS3 (11-14 歳) が中学校 7~9 年、KS4 (14-16 歳) が中学校 1~12 年であり、KS5 (16-19 歳) では大学進学者はシックスフォームで受験勉強、その他の者は継続教育カレッジに所属となる。KS4 が修了すると、GCSE (General Certificate of Secondary Education) という義務教育修了試験を受ける。1986 年に導入されたこの試験には音楽も含まれており、演奏・作曲・

聴取の試験がある。音楽科は、KS1・2・3において必修教科として位置付けられている。授業時数は各学校の裁量に任されている。

KS1・2・3の音楽科の目的と目標は以下である。

【目的】

音楽は、創造性の最も高度な形の1つである普遍的な世界共通語である。質の高い音楽教育は、子どもの音楽愛好心を助長し、音楽をする人としての才能を開花させる。さらに、子どもの自信、創造力、達成感をますます増加させる。子どもが進歩するにつれて、作曲することや、最高の音楽がわかるように聴取することができるように、批判的に音楽に関わるようになる。

【目標】

音楽のナショナル・カリキュラムは、すべての子どもに以下のことを保障することを目標とする。

- 偉大な作曲家と音楽家の作品を含む、幅広い時代・ジャンル・様式・伝統の音楽を演奏し、聴取し、批評し、評価する。
- 自分自身で、そして他者と共に音楽を創造し作曲するために、歌うことを学び、声の使い方を学ぶ。楽器を学習する機会をもち、適切なテクノロジーを使う機会をもち、音楽性をより高いレベルに進歩させる機会をもち。
- 相互に関連する音楽の諸側面：音高、音価、強弱、テンポ、音色、テクスチャー、構造、および適切な記譜法によって、音楽がどのように創造され、上演され、コミュニケーションされるかを理解し、探求する。

音楽科の内容は以下である。

【KS1】

児童は、以下のことを教授されるべきである。

- うたを歌ったり韻文を話すことによって、自分の声を表情豊かに創造的に使うこと。
- 旋律楽器や非旋律楽器を音楽的に演奏すること。
- 広範な質の高い生の音楽や録音された音楽を、集中して、理解して聴取すること。
- 相互に関連する音楽の諸側面を試したり、創造したり、選択したり、組み合わせたりすること。

【KS2】

児童は、自信とコントロールを高めながら、音楽的に歌ったり演奏することを教授されるべきである。児童は、音楽づくりを理解し、音楽的構造の中でアイデアを組み合わせた操作し、聴覚的に記憶した響きの再生を発達させるべきである。

児童は、以下のことを教授されるべきである。

- 正確さ・滑らかさ・コントロール・表現力を高めながら、自分の声や楽器演奏をソロとアンサンブルで演奏すること。
- 相互に関連する音楽の諸側面を用いるという広範な目的のために、音楽を即興し、作曲すること。
- 細部を注意深く聴取すること、聴覚的な記憶を高めて響きを思い出すこと。
- 五線譜や他の記譜法を使用し、理解すること。
- 様々な伝統から、偉大な作曲家や音楽家から選ばれた広範な質の高い生の音楽や録音された音楽を鑑賞し、理解すること。
- 音楽史に関する理解を発達させること。

【KS3】

生徒は、演奏・作曲・および聴取によってそれまでに身につけた知識とスキルを前進させるべきである。生徒は、声楽及び／または器楽演奏の流ちょうさ、正確さ、表現力を発達させるべきである。さらに、音楽の諸側面の表情豊かな使用法を確認して、音楽の様々な構造・様式・ジャンル・伝統を理解すべきである。音楽をする人としてより熟達したことを示すために、弁別力と認識力をさらに高めて聴取すべきである。生徒は、テクノロジーを適切に使い、広範な音楽的文脈と様式を評価し理解すべきである。

生徒は、以下のことを教授されるべきである。

- 多様なソロと音楽科アンサンブルにおいて、声楽や器楽を、音楽的に、流ちょうに、正確に、表情豊かに

演奏すること。

- 即興と作曲：広範な音楽的構造・様式・ジャンル・伝統を利用して、音楽的アイデアを拡大し、発展させること。
- 広範な音楽的様式・ジャンル・伝統において、五線譜や他の関連する記譜法を適切に正しく使うこと。
- 調性・様々なタイプの音階・音楽のその他の手法の使用を含めて、相互に関連する音楽の諸側面を、表情豊かに、より洗練させて認識し、使用すること。
- 偉大な作曲家や音楽家の広範な音楽をより弁別して聴取すること。
- 自分が演奏し、聴取した音楽とその歴史をより深く理解すること。

(松下友紀・吉富功修)

2 考察

ナショナル・カリキュラム音楽における鑑賞・聴取に関わる内容は非常に少ないので、音楽科の内容全体で検討する。「相互に関連する音楽の諸側面によって、音楽がどのように創造され、上演され、コミュニケーションされるかを理解し、探究する」「相互に関連する音楽の諸側面を試したり、創造したり、選択したり、組み合わせたりする」「音楽的構造の中でアイデアを組み合わせたり操作し、聴覚的に記憶した響きの再生を発達させる」「相互に関連する音楽の諸側面を用いるという目的のために、音楽を即興し、作曲する」「聴覚的な記憶を高めて響きを思い出す」という内容は、習得した音楽の諸要素の知識や聴覚的なスキルを使って、課題解決するものであり、音楽の本質に関わるコンピテンシーであるといえるだろう。しかも、創作活動等をとおして、体験的に育成しようとするところが特徴的である。(三村真弓)

V アメリカの全米コア音楽標準 (2014)

1 全米コア音楽標準の内容

全米コア芸術標準は、1994年に策定された全米芸術教育標準の改訂版として2014年に刷新された。この標準のうち音楽教育に関するものが全米コア音楽標準である。この全米コア音楽標準は、旧標準とは大きくその構成が変更されており、これまで9つの内容標準で示されていたものが、音楽、美術、演劇、ダンス、メディアアートすべての芸術領域に共通する4つの芸術プロセス(①創造、②演奏・提示・制作、③反応、④関連性)と、すべての芸術領域に共通する11のアンカー標準(Anchor Standards)によって示されている。各プロセスの定義は以下のとおりである。

表5 全米コア芸術標準における芸術プロセスの定義およびアンカー標準の概要

芸術プロセス			
創造 定義：新しい芸術的発想や作品を考案し発展させる。	演奏 定義：解釈と表現を通して芸術的発想や作品を理解する。	反応 定義：芸術を伝える意義を理解し評価する。	関連性 定義：芸術的発想や作品と個人的意味や外部との文脈を関連付ける。
アンカー標準			
1. 芸術的発想や作品の創造と概念化 2. 芸術的発想や作品の構造化と展開 3. 芸術作品の改良と完成	4. 発表のための芸術作品の選択、分析、解釈 5. 発表のための芸術的技術と作品の発展および改良 6. 芸術作品の発表を通じた意図の伝達	7. 芸術作品の理解と分析 8. 芸術作品の意図や意味の解釈 9. 芸術作品を評価するための基準の適用	10. 芸術を作るための知識と個人的な経験の統合と関連付け 11. 理解を深めるための、芸術的発想や作品と社会的、文化的、歴史的な文脈の関連付け

(National Core Arts Standards: A Conceptual Framework for Arts Learning, p.13より筆者作成)

この定義から、全米コア芸術標準が思考や認知の側面を強調していることがわかる。また、芸術をその意味や意義、文脈と関連付けて理解するといった、いわゆるメタ的な認識が求められていることも特徴的である。さらに各芸術分野において、この4つの芸術プロセスに対して、いくつかのプロセス構成要素、およびパフォーマンス標準(Performance Standards)が各学年に示されている(表6)。

表6 全米コア音楽標準にみる芸術プロセスの構成要素およびパフォーマンス標準の概要

	創造	演奏	反応	関連性
プロセス構成要素	イメージ	選択	選択	関連性
パフォーマンス標準	様々な目的と文脈のための音楽的発想の生成	関心, 知識, 技術的熟練, 文脈に基づいて提示される様々な音楽作品の選択	具体的な目的や文脈にふさわしい音楽の選択	音楽づくりのための知識と個人的経験の統合と関連付け
プロセス構成要素	計画と実行	分析	分析	関連性
パフォーマンス標準	明確な目的と文脈のための音楽的発想の選択と展開	様々な音楽作品とそれらの上演される意味合いの構造と文脈の分析	様々な音楽作品の構造や文脈がどのように反応の情報を与えるのか分析	音楽的発想や作品と, 理解を深めるための様々な文脈との関連付け
プロセス構成要素		解釈	解釈	
パフォーマンス標準		創作者の意図を考慮した個人的解釈の展開	創作者/演奏者の表現の意図を反映した音楽作品の解釈の裏付け	
プロセス構成要素	評価・改良	リハーサル・評価・改良	評価	
パフォーマンス標準	適切な基準を満たした音楽作品を作るために選択した音楽的発想の評価と改良	個々, もしくは他者との協力による個人, またはアンサンブルの上演の評価と改良	分析, 解釈, 確立された基準に基づいた音楽作品や演奏の裏付け	
プロセス構成要素	提示	上演		
パフォーマンス標準	作曲者の意図を表現し, 熟練の技巧を実演し, 独創性を示す創造的な音楽作品の共有	適切な解釈と技術的な正確さ, また聴衆と文脈にふさわしい方法による表情豊かな演奏		

(Core Music Standards EUs, EQs, Definitions より筆者作成)

2 考察

批評力について各学年のパフォーマンス標準を概観すると, その特徴として次の点が挙げられる。第1に, 音楽の諸要素や構造の解釈や評価だけではなく, 理由や意図, 目的に応じた活動に重きが置かれている点, 第2に, 音楽の文脈からその適切さを判断するプロセスが重視されている点である。これらの特徴は, 21世紀型スキルの育成と関連してメタ的な認知活動を重視するという全米コア芸術標準の特性に関連している。また, 音楽の諸要素などの音楽的側面からの分析や評価に留まらず, 扱う音楽が目的や関心において適切か否かを文脈に照らし合わせながら判断する方向性に転換したことは旧標準との大きな相違といえる。また, 今回の改訂によってその構成は大幅に変化を遂げ, これまでの行動や活動を重視するスタンダードではなく, 思考や認知のプロセスに着目し, 音楽をその目的や文脈から捉えることを重視するようになったことが今回改訂された全米コア音楽標準の構成の特徴といえる。(峯 恭子)

VI 総括

イギリスの音楽カリキュラムは, 少ない内容の中でも, 音楽科の本質に関わるコンピテンシーが多くの割合を占めていることがわかった。しかも, 習得した知識・スキルを, 体験をとおして活用し, 問題解決へと活用しているところが特徴的であった。しかし, イギリスの音楽カリキュラムには, 汎用的コンピテンシーは含まれていない。

ドイツ・ハンブルク州の音楽カリキュラムには, コンテンツに加えて, 音楽の本質に関わるコンピテンシーが含まれており, その一部は汎用的コンピテンシーにも繋がっていることが確認できた。一般的にドイツのカリキュラム構成の特徴として, コンピテンシーの枠組み自体が各教科の本質に関わるもの(教科専門的コンピテンシー, 学習方法論的コンピテンシー)と, 通教科的に育成する汎用的なコンピテンシー

(社会的コンピテンシー、自己コンピテンシー)によって構成されていることが知られている。音楽カリキュラムもこの枠組みに従って検討・作成されており、そもそも音楽科の本質に関わるコンピテンシーと汎用的なコンピテンシーの両側面を併存させることを念頭に置いて、コンピテンシーを強調したカリキュラムを構成している。

アメリカの音楽カリキュラムには、「概念化」「構造化」「分析、解釈」「評価の基準の適用」「文脈の関連付け」「構造と文脈の分析」「個人的解釈の展開」「解釈の裏付け」等の、汎用的コンピテンシーが多く見られる。しかし、音楽の知識のコンテンツはあるものの、それに関わるスキルのコンテンツ、例えば聴取力や識別力や感受力や知覚力は含まれていない。したがって、最初に提示した2つの手順の①に基づいてカリキュラムが構成されていると推察できる。

一方、日本の音楽カリキュラムは、主としてコンテンツベースであることが明らかとなった。音楽科の本質に関わるコンピテンシーや汎用的コンピテンシーの意図がまったくなかったとはいえないが、具体的にそれを読み取ることはできない。次期の学習指導要領改訂において、どのようなコンピテンシーベースのカリキュラムが作成されるのかが期待される。しかし、教科教育の視点から客観的にみると、汎用的コンピテンシーを中心として、それを教科でどう育成するのかという手順のみでカリキュラムを構成することは、教科の本質から離れていく危険性がある。カリキュラム構成には、通教的に育成する汎用的なコンピテンシーを、音楽科の特質に応じてどのように育成するのかという手順と、音楽科の本質に関わるコンピテンシーを探究し、それを汎用的なコンピテンシーとどのように関連付けていくのかという手順の両方が重要となるであろう。(三村真弓・伊藤 真)

引用・参考文献

- ・ Freie und Hansestadt Hamburg, Behörde für Schule und Berufsbildung (Hrsg.) (2011) *Bildungsplan Grundschule, Musik*.
- ・ Freie und Hansestadt Hamburg, Behörde für Schule und Berufsbildung (Hrsg.) (2011) *Bildungsplan Stadtteilschule Jahrgangsstufen 5-11, Musik*.
- ・ 文部科学省 (2008a) 『小学校学習指導要領解説 音楽編』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_007.pdf
- ・ 文部科学省 (2008b) 『中学校学習指導要領』
- ・ 文部科学省 (2008c) 『高等学校学習指導要領』
- ・ 武内裕明 (2014) 「米国コア音楽標準草案における聴取の扱い：第8学年までの標準の検討を通じて」『弘前大学教育学部紀要』 第111巻, pp. 113-119。

Web 資料

- ・ Core Music Standards, <http://www.nafme.org/my-classroom/standards/core-music-standards/>.
- ・ 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 (2014a) 「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—【主なポイント】」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/06/03/1346335_01_1.pdf
- ・ 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 (2014b) 「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335_02.pdf
- ・ NATIONAL CORE ARTS STANDARDS, <http://www.nationalartsstandards.org/>, 2015/11/04.
- ・ National Core Arts Standards: A Conceptual Framework for Arts Learning,
http://www.nationalartsstandards.org/sites/default/files/NCCAS%20%20Conceptual%20Framework_4.pdf.